

待降節第4主日 B年

ルカ 1・26-38

2023.12.24 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日は待降節の第4主日、もう間もなく、今年の場合は今日が24日に当たっていますから、今日の夜からクリスマスのお祝いが始まります。

この第4主日の福音の朗読は、マリア様が救い主の母になるという恵みを受け入れる、そういう場面が朗読されます。マリア様は、わたしたちのカトリックの信仰によれば、終生おとめであり、そして母である。そういう、おとめであることと母であることが、マリア様という一人の人格の中に両立しているとわたしたちは信じています。伝統的なアイコンとか、あるいは伝統的なマリア様のご像では、マリア様が青い色と赤い色の服を着ていることが多いです。青は母を表わし、そして赤はおとめを表わすと言われています。だから、赤と青を両方着ているマリア様はおとめであり母であると言われますが、これは何よりも、神様との関係、あるいはマリア様の心の在り方を表わしている。身体がどうであったかとかいうこと以上に、神様はマリア様をリアルなシンボルとして人類、そしてとりわけ教会にお与えになった、というふうにならわたしたちは信じていますので、マリア様ご自身のすべてが母でありおとめであるわけですが、とりわけ魂とか心の在り方、それについてそう言われるというふうに取り取る必要があると思います。

聖書の時代においては、「おとめ」というのはこれから結婚相手が、大体は父親によってですけど、与えられて、そして子どもを待ち望む、そういう意味では恵みを待ち望んでいる状態にあります。一方で「母」というのは、聖書の中で女性にとっては子どもたちの母になるということが一つの恵みを受けていることの証^{あかし}として捉えられている、そういう古代の時代、当時の文化の文脈の中での言い方になりますけども、母というのはそういう意味で恵みを既に頂いているという、そういう状態です。

だから、恵みを待ち望んでいるのと同時に恵みを既に頂いているという、それがマリア様の中に両立しているということになりますし、わたしたちが今日待降節として主のご降誕の恵みを待ち望むという形でごミサを捧げていますけども、それ自体も既に頂いている信仰の恵みを土台として待ち望むことができるという意味では、わたし

たちが日々お捧げしているミサそのものも、既に恵みを頂いていると同時に将来の神様から頂く救いに開かれている、そういう意味では、おとめであると同時に母である、そういう要素を持っているということが出来ます。

が、それは、実は、一人ひとりの心の在り方においてはそう簡単ではないというふうに言わなければなりません。恵みを待ち望んでいるという人にとっては、特に個人の人生においては、こういうことが実現してほしい、そのような恵みを神様から頂きたいと待ち望んでいる、その間はそのことをずうっと思っているから、既に頂いている恵みに対して気が付かない、あるいは心が向かないという、そういうことはあり得ることです。一方で、母である、既に恵みを頂いたっていう状態にあっては、その頂いた恵みを失わないように保ちたいっていう、そういう思いの中に埋没していくというか、これを失わないように、っていうふうになる。

あるいは、また、出会いの恵みなんかでは、ほんとに自分の人生を変えてくれるような、あるいは支えてくれるような素晴らしい出会いがあった、司祭との出会いとか、学校の先生との出会いとか、なんでもいいんですけど、そういう出会いの恵みを頂いた人にとっては、今度はその後から出会う者たちを、頂いた素晴らしい出会いを基準に評価していくので、どんな場合でも足りない、あるいはあの素晴らしい方と、神父さんと違うとかいうことで、神様が与えようとされる違う角度からの、また新しい恵みに対して閉じてしまうということがあり得るわけです。母であるということは、新しい恵みに閉じる、そういう誘惑にさらされることでもあります、恵みを受けた者であるということは。

マリア様の中においては、それが両立している。神様から既にいただいている恵みそのものをほんとに直視して受け取ると同時に、しかし神様がご自分のご計画の中で更に準備されている、与えようとされる恵み、そのことに待ち望み開かれている。そのために今頂いた恵みそのものに固執しない、という面でもあるわけです。マリア様が救い主の母になるという在り方は、自分の思い描いていたような形ではない、そういう形で母になっていくということを受け取ることができるというのも、自分の思いを超える神様の恵みに対して開かれているからです。

わたしたちが救いを、あるいは恵みを待ち望む者であるにしても、また既に恵みを頂いた者であるにしても、その中に閉じ籠ることなく、待ち望みながら既に頂いていることに気が付く、特に神様との出会いの信仰の恵みということを頂いているからこそ、いろんなことを神様に願い求めることができるんだということだし、そして願い

求めながら、既に頂いているいろんな具体的な出来事や現実もそうだし、そして何よりも信仰の恵みという既に頂いた恵みの上に全てがある、その先にまた神様が導こうとされる、そういうようなマリア様のお姿を思い描きながら、わたしたちも絶えず、心のレベルにおいておとめでありそして母である、恵みを待ち望むと同時に既に頂いたものでもあるという神様との関係に絶えず開かれていく者でありたいなあと思います。

今日、この待降節第4主日にあたって、一人ひとりが、既に神様から頂いている信仰の恵みによって、またその先にある恵みを待ち望むことができる、そういう神様の神秘というか導きに対して心を開きながら、更に恵みに近づいていくことができますように、マリア様の取り次ぎのうちにこのごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>